

遊び歌の音楽的特徴と動きの関連に関する一考察

森 保 尚 美*

(2014年11月12日 受理)

A Study of Relationships between Musical Characteristic of Action Rhymes and Japanese Children's Movement

Naomi MORIYASU*

The purpose of this study is to demonstrate teachings in response to musical characteristics of action rhymes by investigating relationships between play in action rhymes and children's movement in pre-school education and school education.

In this paper, I analyze *nihon no warabe uta zen 4 kan* [Japanese children's book all 4 volumes] contained songs for aged 2 to 12 in the music lesson school called *tontonyakata* from 1981 to 2012 and *sekaino uta wo asobu rhythmic game 67 sen* [67 eurhythmic games for playing with songs from around the world] which is based on the Dalcroze eurhythmics and examine relationships between movement during play and musical characteristics of songs.

Keywords: action rhymes 遊び歌, movement 動き, musical characteristic 音楽的特徴

1. はじめに

現在、保育や教育の場で取り扱われている子どもの遊び歌には、伝承されてきたわらべ歌や世界の遊び歌、民謡的要素のある唱歌、諸外国の旋律に日本語の歌詞を充てた歌、ポップスやサンバなど、様々なジャンルがある。

歌詞には各国ごとに言語の構造上の特徴があり、言語の特徴がその国の歌の特色を形作っているように、音階や拍などの特徴がその国の舞踊の特色を形づくっていることは一般的に認識されている。遊び歌は、言葉を伴っていることから、自然発生的にうまれた歌であったとしても、その国特有の言葉のリズムの影響を受けていると考えられる。

本稿では、日本の伝承歌遊びを実践した茨城県つくば市の音楽教室「とんとんやかた」(1981~2012)で2歳から12歳が歌っていた『にほんのわらべうた全四巻』¹⁾における遊び方の動きを整理する。次にジャック・ダルクローズが提唱したリトミック音楽教育をふまえた『世界の歌を遊ぶリトミック・ゲーム67選』²⁾における動きを、拍などの音楽的特徴と動きとの関連から整理する。本研

究は、それらの比較・関連を通して遊び歌の音楽的特徴に応じた動きに関する働きかけのあり方について検討することを目的とする。

2. 公的機関における遊び歌と動きの関連についての表記

(1) 保育所保育指針解説書の記述と考察³⁾

公的機関における遊び歌と動きに関連する表記を概観してみたい。まず、保育所保育指針解説書によると、「子どもは、身体機能が発達することにより、保育士等の声や音の響き、音色に親しむことから、保育士等の歌うわらべ唄などにあわせて体を揺らしたり、一緒に歌おうとします。また、手遊び歌などのしぐさをまねたり、歌に合わせてリズムをとったりするようになります。さらに、保育士などが歌う楽しく心地良い歌を聞き、自分も同じように表現したいという気持ちになり、一緒に歌ったり、リズムに合わせて体を動かしたりすることを楽しんでいきます。」と表記されている。ここでは、発達に伴った子どもの動きの事実が示されており、自発的な動きや、共感を基盤にした模倣の動きが子どもの喜びにつながることを示されている。文中の「体を揺らす」「リズム

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

ムに合わせて体を動かす」先導となる保育者が、どのように体を揺らし、どのようにリズムに合わせて体を動かすことが子どもの自発的な動きや模倣の動きを引き出すのが重要であることは言うまでもない。保育者養成においては、動きの実践的な体得とともに音楽経験の少ない学生に対してどのような動きが子どもの喜びにつながるのかといった動きと音楽的特徴との関連を意識させる働きかけも有効ではないかと考えている。

(2) 幼稚園教育要領解説⁴⁾の記述と考察

幼稚園教育要領解説の第2章「表現」から、関連記述を3カ所抜粋する。

1) 感性と表現に関する領域「表現」

幼児は音楽を聴いたり、絵本を見たり、つくったり、かいたり、歌ったり、音楽や言葉などに合わせて身体を動かしたり、何かになったつもりになったりなどして、楽しんだりする。これらの表現する活動の中で幼児は内面に蓄えられた様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み立てながら想像の世界を楽しんでいる。

2) 感性と表現に関する領域「表現」[内容] (1)

幼児は生活の中で、例えば、身近な人の声や語り掛けるような調子の短い歌、面白い形の遊具、あるいは心地よい手触りのものなど、様々なものに心を留め、それに触れることの喜びや快感を全身で表す。

3) 感性と表現に関する領域「表現」[内容] (4)

幼児は、感じたり、考えたりしたことを身振りや動作顔の表情や声など自分の体そのものの動きに託したり、音や色、形などを仲立ちにしたりするなどして、自分なりの方法で表現している。

ここでは、想像ごっこや生活の中で触れる声や歌など、思いを置き換える媒体としての歌や動きについて示されている。保育者養成校においても様々な想像遊びを経験させることが求められるが、中村(2010)がヴィゴツキーの想像論について説明したように⁵⁾、概念的思考の発達している大学生の想像力と、就学前の子どもの想像力の様相には隔たりがあるため、子どもの現実生活の具体的な事物に想像の拠り所をもたせたり、共有した子どもの絵本をもとに歌や動きを伴う遊びを展開したりできるよう促す必要があると考える。

(3) 小学校学習指導要領解説音楽編⁶⁾

小学校学習指導要領音楽編においては、「遊び」という文言は低学年段階の解説で使用され、歌詞のある「遊びうた」の他に楽器や身近な素材や声などの音で遊ぶ「音遊び」が示されている。

「遊びうた」と動きに関する記述については、表現領域の指導事項として、「低学年では、児童が歌うことが大好

きになるようにすることが重要となる。そのためには、遊びながら歌う活動や体の動きを伴った活動を効果的に取り入れるとともに、「[共通事項]との関連を十分に図り、楽しい歌唱の活動を進めることが大切である。」と示されている。また、鑑賞領域の教材を選択する観点の1つとして「我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲」が挙げられている。

このように、小学校学習指導要領解説では、低学年において、遊びながら歌う活動や動きは、歌や音楽への興味関心を深めるための取り組みの1つであり、そこから感じ取ったことを音楽的要素と関連して指導することが重視されていると考えられる。

3. 先行研究について

(1) 日英伝承遊び歌の比較研究

鷺津(1997)は、子どもの歌と動きについて詳細に観察し、また歌い手として子どもの歌を追究しながら日英伝承遊び歌の比較研究を行った⁷⁾。イギリスの子どものうたに関して、弾みのある英語の言語リズム素が、多くの8分の6拍子のうたや、スキップの動作に関連していると示している。鷺津は、日本のわらべうたの中には8分の6拍子の曲がまったく見つからないのに、イギリスの子どものうたには8分の6拍子の曲が非常に多いことや、日本のわらべうたに混合拍子が多いことに触れた上で、4小節で構成されるリズムユニットが積み上げられて1つの曲になっている英語の伝承遊び歌とは異なり、日本のわらべうたは1拍子で構成されているのではないかと指摘している。

また、8分の6拍子の曲を、当初2拍子感覚で歩きながら歌っていた幼児が、身体機能が発達してスキップできるようになると、無意識のうちにスキップしながら同じ歌を歌うようになることに気付き、成長に応じて、遊び方のリズムが発展していくことに言及している。加えて、伝承遊び歌『桑の木のまわりで』で遊ぶ時、幼児の時には歩きながら歌っているのに対し、小学校低学年になると指示のない状態でもスキップしながら楽しそうに歌っていることをイギリスで観察した。そして、日本のわらべうたに「スキップ」の動作が現れにくいことに触れ、遊びと動作について下のようにまとめた(表1)。調査対象は、イギリスと日本の伝承遊び歌のうち、場所を移動する遊び歌である。

表1から、日本のわらべうた数は、体形にかかわらず、歩きながら歌われる動きが最大数であるのに対し、

表1 遊びの動作別曲数

		英国童謡		わらべうた	
シンギング・ゲーム (総計)		293		104	
シンギング・ゲームの中で体形を取る遊び歌		186		84	
体形	1曲の中で輪・列両方の隊形を取る遊び歌	4		5	
	輪になるものと列になるもの別 (体形別)	輪	列	輪	列
		141	45	47	37
動き	スキップ (ホップ・ギャロップ含)	36	12	0	0
	ダンス	29	4	0	0
	歩き	22	11	30	30
	走り	7	5	2	1
	スキップかダンスまたは歩き?	12	8	0	0
	集団での場所移動なし	35	3	15	6
	集団での場所移動なし?	3	2	0	0

出典：鷺津名津江「わらべうたとナーサリーライム」晩聲社，P. 186, 1997

英国童謡では輪になってスキップする動きが最大数であり、輪の体形において次位となる動きがダンスであることがわかる。

現代の子どもたちは、マスメディアに触れる機会が多く、日本のわらべうたの動き以上に、西洋音階で創られた子どもの歌や世界の歌等豊富なリズムに囲まれている。一方では、日本語で生活している以上、音楽経験の少ない子どもたちも、日本語の言語リズムには多大な影響を受けている。今後は社会のグローバル化に伴って、英語の言語リズムの影響を受ける機会は増えていく。このことは、表現に関する学びのカリキュラム作りにとって注目すべき内容である。

(2) リトミック教育

ダルクローズ・システムによるリトミック教育に関連した指導書やリトミック教育の楽譜集は、子どもの成長の段階毎に示されていることが多い。後藤田 (2003)⁸⁾ は、子どもの成長と歌遊びの種類について、0歳～2歳の乳幼児は保育者と触れ合う遊び歌や子供をあやす動作を伴う遊び歌が適しており、1歳までは唱え言葉で歌い聴かせるが、1歳を過ぎると歌いかけの模倣遊びに変化すると記した。また、いずれにしても、この発達段階では1対1の2人で行う形態であることを強調している。そして、3歳～5歳にかけては、成長に応じて遊ぶ対象人数が増え、音域が6度までの5音構成や6音構成の歌が、また4歳後半頃から、役割を交代して遊ぶ簡単なルールのある遊び歌が見られると記している。後藤田によれば、歌遊びの種類数の最盛期は6歳から8歳で見ら

れ、各国の生活文化や伝統的民族性の影響を受けた遊び歌で遊ぶようになるという。さらに、遊びの傾向の差異について、東アジア諸国は、勝敗や駆け引きをテーマとした遊びや、まりつき・お手玉など技能比べをする遊びの歌が多いのに比べ、欧米諸国は男女の交流を楽しもうとする遊びや動きが多くなる傾向があることを特質として挙げている。

4. 『にほんのわらべうた全四巻』(近藤2009)における遊び歌と動き

『にほんのわらべうた』は、子どもたちを対象に実践されたうたを収録したものであり、遊びの動きが写真と文で示されている他、楽譜とCDも添付されていることから、本研究の分析に適していると考えて取り上げた。前述の鷺津の整理に、遊び歌の音楽的特徴を加えて筆者がまとめたものが表2である。

なお、元来の遊び方を変化させたと明記されている歌が数曲あったが、表2では掲載されている遊び方の動きをカウントすることとした。また、表1の鷺津の分類で挙げられた「スキップかダンスまたは歩き？」の項は、『にほんのわらべうた』では皆無だったため項を削除し、左右、上下、船こぎの動きを指す「揺らし」の項を追加した。また、子守唄に関しても、子どもの遊びを伴った歌であったため、カウントした。

鷺津の先行研究と同様の結果となったのは、輪や列の体形をつくる遊びのうち、歩く動きが多いことやスキップの動きが少ないことである。また、走る動きも少な

く、歌い終わってから走る遊びは多く見られるが、歌っている間は歩いていることがわかった。唯一見られたスキップの動きは『うまはとしとし』というわらべうたで、付点8分音符と16分音符によるスキップのリズムに動きが連動していた。表2の揺らしの動き（反転部分）は、多人数で大きな輪になって手をつなぎ、左右または上下に動かすものと、2人組で両手をつなぎ、輪になっ

て左右に振る動きなどが総数で15曲見られ、歩く動きの次位となっている。

5. 『世界の歌を遊ぶリトミック・ゲーム67選』（神原編著、2012）における歌と遊び方の分析

神原らの選出した67曲の歌は、保育や学校で使用されている歌集や教科書にも掲載されており、実践的なリト

表2 『にほんのわらべうた』動作別曲数

『にほんのわらべうた』巻名		わらべうた①	わらべうた②	わらべうた③
遊び歌（総計）		39	36	43
遊び歌の中で体形のあるもの		18	10	7
体形	輪＋列の双方の体形有	1	0	0
	輪	12	7	7
	列	6	3	0
動き	スキップ（ホップ・ギャロップ含）	0	1	0
	ダンス	0	0	0
	歩き	19	7	1
	走り	0	0	1
	揺らし（集団での場所移動なし）	5	4	6
	集団での場所移動なし	15	2	0
	集団での場所移動あり	14	8	0

表3 対象曲一覧

1	グリーンスリーブス（イギリス）	19	雪のおどり（チェコスロバキア民謡）	36	ロック・マイ・ソール（黒人霊歌）
2	ギャロップ（フォスター作曲）	20	ミッション・インポシブル（ラロ・シフリン作曲）	37	天国と地獄（2）（オッフエンバック作曲）
3	あめふり（日本）	21	アリラン（韓国民謡・朝鮮民謡）	38	こいぬのビンゴ（アメリカ民謡）
4	おちゃらか（日本の伝承遊びうた）	22	サラスボンダ（オランダ民謡）	39	手のひらを太陽に（いずみたく作曲）
5	だるまさんがころんだ	23	グリーンスリーブス（イギリス民謡）	40	山の音楽家（ドイツ民謡）
6	おちたおちた（日本の伝承歌）	24	はさみとき（イタリア民謡）	41	ジングルベル（ピアポント作曲）
7	げんこつやまのたぬきさん（日本のわらべうた）	25	ロンドンデリー（イギリス民謡）	42	メリーさんのひつじ（2）（アメリカ民謡）
8	ごんべさんのあかちゃん（アメリカ民謡）	26	きらきら星（フランス民謡）	43	ロンドン橋（2）（イギリス民謡）
9	カリンカ（イワン・ペトローヴィチ・ラリオーノフ作曲）	27	うみのなかを泳いでいたら	44	おもちゃのチャチャチャ（越部信義作曲）
10	アビニヨンの橋の上で（フランス民謡）		（かんばらまさゆき詞・リト研広島特2クラス曲）	45	ボクと蚊の戦い（守田ちひろ作曲）
11	アビニヨンの橋の上で（2）	28	子守唄（バルンハルト・フリース作曲）	46	ゆかいなまきば（アメリカ民謡）
12	ロンドン橋（イギリス民謡）	29	アルプス一万尺（アメリカ民謡）	47	クラリネットをこわしちゃった（フランス民謡）
13	なべなべそこぬけ（わらべうた）	30	アヴェ・マリア（シューベルト作曲）	48	カリンカ（ロシア民謡）
14	メリーさんのひつじ（アメリカ民謡）	31	楽しいショティッシュ（スウェーデン民謡）	49	よるこびの歌（ベートーベン作曲）
15	十五夜さんのもちつき（伝承遊び）	32	ユーモレスク（ドボルザーク作曲）	50	夏の山（ドイツ民謡）
16	おどろろ楽しいポーレテケ（ポーランド民謡）	33	おお牧場は緑（チェコスロバキア民謡）	51	桃太郎
17	こいぬのビンゴ（アメリカ民謡）	34	うるわしのやしの島（インドネシア民謡）	52	サンタが町にやってくる（J・F・クーツ作曲）
18	ラ・カクチャ（メキシコ民謡）	35	ぐーちょきばー（フランス民謡）	53	あんたがたどこさ（日本のわらべうた）

表4 リトミック・ゲームの動作別曲数

書名		世界の遊び歌67選		
ジャンル		諸外国	日本童謡	わらべうた
対象とした遊び歌（総計）		40	6	7
遊び歌の中で体形のあるもの		3	0	0
体形	輪 + 列の双方の体形有	0	0	0
	輪	2	0	0
	列	1	0	0
動き	スキップ（ホップ・ギャロップ含）	3	1	0
	ダンス	3	0	0
	歩き	11	1	2
	走り	3	0	0
	揺らし（集団での場所移動なし）	3	0	0
	集団での場所移動なし	0	0	0
	集団での場所移動あり	0	0	0

ミック教育書として着目したため、動き方の分析対象とした。曲名をもたないタイトル（「音の響き」など）について対象外とし（表3）、67のゲーム中53曲を動作別に筆者が整理した（表4）。

表4においては、伝承遊びうたやわらべうたを「わらべうた」として分類し、大正期以降に作られた子どもの歌を日本童謡としてカウントした。表3の番号は筆者の付した通し番号である。

6. 遊び歌の音楽的特徴と動きの関連に関する考察

ギャロップやスキップを伴う遊び歌の旋律には、先行研究と同様に日本の歌においても付点8分音符と16分音符によるリズムが中心的なリズム素であった。なお、「日本童謡」は、伝承されてきたわらべうたではなく、子どものために大人が作曲した曲を指している。神原らが著したリトミック・ゲーム中で、スキップで遊ぶ日本童謡は、大正時代に作曲された『あめふり』（北原白秋作詞／中山晋平作曲）であった。また、諸外国の歌で遊ぶ「揺らし」の動きについては、『にほんのわらべうた』にあるように、集団で手をつないで左右や上下にふる動きはなかった。2人で手をつないで左右に揺れる『なべなべ底抜け』の動きに類似していても、回転した後背面で止まらず、そのまま元の形まで1回転する動きが示されていた。これは、揺れる動きを伴う日本のわらべうたが2拍子または4拍子なのに対し、揺れて遊ぶ諸外国の歌が8分の6拍子であったことに関連している。

また、歩く動きは諸外国の遊び歌にも多く用いられて

いたが、『にほんのわらべうた』の遊び方との違いは、個別に歩くことであり、遊ぶ仲間と同じ方向に動かないという点に特徴がある。神原らが著したリトミック・ゲームでは、感じ取ったように個人で動いたり、集団の輪の中や外を、1人ずつステップを踏んで交代して動く遊びが示されていたが、『にほんのわらべうた』で遊ぶ歩き方は、集団でひとつのもの（花や波、風）を表す動きが多いことがわかった。また、『世界の歌を遊ぶリトミック・ゲーム67選』には、2人組で周るといったダンスの動きや、途中にじゃんけん遊びが取り入れられているものがあった。筆者は、この様相について、東アジア諸国で見られる「勝敗」と欧米諸国で見られる「交流」との動きの融合が象徴されており、現代の日本の子どもの文化や嗜好に則した動きが紹介されたものと考えられる。

このように、近年実践された遊び歌の音楽的特徴と動きの関連を整理し、先行研究をふまえて考察した結果、筆者は、遊び歌が、文字のない文化に生きる就学前の保育内容から、就学後の学習内容（視唱や読譜を含んだ歌唱の学習）への移行を円滑にし、子どもの音楽的な喜びを損なわない教材的価値を有しているのではないかと考える。保育者養成においても、遊び歌の体験を通して学生の音楽的センスを磨くとともに、各曲の音楽的特徴と動きとの関連について気付いたり、意識したりできるように対話しながら、諸国の音楽文化についても認識する必要があると考えている。

引用文献

- 1) 近藤信子, 「にほんのわらべうた全四巻」, 福音館書店, 2001.
- 2) 神原雅之, 「世界の歌を遊ぶリトミック・ゲーム67選」, 明治図書, 2008.
- 3) 「保育所保育指針解説書」, 厚生労働省, フレーベル館, pp. 97-98, 2008.
- 4) 「幼稚園教育要領解説」, 文部科学省, フレーベル館, pp. 158-163, 2008.
- 5) 中村和夫 「ヴィゴツキーに学ぶ子どもの想像と人格の発達」, pp. 26-27, 福村出版, 2010.
- 6) 「小学校学習指導要領解説音楽編」, 文部科学省, 教育芸術社, p. 22, 2008.
- 7) 鷺津名津江, 「わらべうたとナーサリー・ライム」, 晩聲社, 1997.
- 8) 後藤田純生, 「リトミック教育の現在」, 日本ダルクローズ音楽教育学会編, 開成出版, pp. 267-280, 2003.